



ごあいさつ

理事長 西里 卓次

札幌清田病院は、1987年に開設して35年目を迎えることができました。平成25年に隣接地に移り、9年目となります。医療をとり巻く環境、とりわけ病院経営に関する状況が厳しい中、これまで御指導、御支援を賜りました皆様に心より御礼を申し上げます。また、当院を御利用して頂いている地域の皆様にも深く感謝申し上げるとともに、今後も良質な医療の提供を目指してまいりますので何卒よろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中でも2025年問題や2040年問題等、人口構成の変化等を見据えた地域医療構想をめぐる議論は継続しています。また、医師の働き方改革への対応も欠かせません。当院は、設立以来地域住民の方の健康を守る地域の病院（Community Hospital）としての役割と専門的な医療を提供する病院（Specialized Hospital）としての役割の最良のバランスのあり方を意識してきました。中小病院のあり方として、地域密着型である事や多機能である事等も提言されていますが、当院の専門である消化器と血液の癌の診療を中心として職員の皆さんと一緒に時代にふさわしい医療を今後も提供してまいりたいと願っております。

令和2年1月からのCOVID-19パンデミックでは、当院もPPE、消毒用エタノールも不足する状況でPCR検査へのアクセスも必ずしも良好ではありませんでした。できる事が限られる中、院長を中心に病院全体で少しずつ態を整え発熱外来、ワクチン接種とある程度地域の中で役割を果たす事ができるようになりましたが職員の皆さんの協力は何よりの支えでありました。全室個室とはいえ、3病棟のみでゾーニングも難しいという限界はありますが、今後も収束まで皆さんと粘り強く努力してまいりたいと思います。

コロナ禍の影響は大きく、病院経営についても今だにコロナ以前に回復できていない指標も少なくありません。さらに、令和2年は、遅まきながら電子カルテ導入を始めようとした年でしたが中断せざるを得ませんでした。より効率的にチーム医療を充実するためにも不可欠なシステムでありますので、今年こそはと再始動したところです。皆様の御協力を何卒よろしくお願いいたします。また、移動や集まることが難しくなったために、研修や学会への参加も厳しく制限された2年間でありました。現在、多くの学会がWeb開催となり、オンデマンドを利用すれば参加できる講演が増えるメリットもありますが、収束後には対面開催の良さを取り戻したいものです。ただ、この間にもWeb研修等で資格取得等を果たした職員の方も少なくありません。学ぶ機会を逃さない工夫も大切といえましょう。

感染予防に気を使いながら、適正な医療を提供するには通常より余分な手続きが必要となり、ストレスが蓄積します。コミュニケーションに気を配り、チームワークを良くしてストレスへの抵抗力を高め今年も良い医療をご一緒に提供できればと思います。そのためにも、この苦しい時期の皆さんの努力がまとめられた今回の年報から自分達の仕事をふり返し、次のステップにつなげていける事を願います。



ごあいさつ

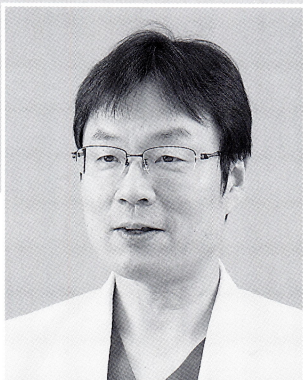
院長 山内 尚文

コロナ禍により、世界と日本のありようは、大きく変わり、この原稿を書いている時点で、オミクロン株が爆発的に流行しており、最前線にたつ医療の現場は、依然として厳しい状況が続いています。当院で、新型コロナウイルス患者さんが、外来で初めて確認されたのは、2020年3月10日でした。それ以後、感染防止委員会が中心となり、外来の一般患者さんと発熱患者さんの動線の分離、入院患者さんへの面会制限、疑似陽性あるいは濃厚接触の患者さんの入院時の対応、職員への感染防止教育など、徹底した感染防止対策を行いました。2020年10月には、救急玄関横に、発熱患者さんの外来診療専用のプレハブ棟を設置し、11月からは、札幌市からの要請に応え、発熱外来を設置しました。2021年12月までに、当院で施行したPCR検査は、約5000件で、検査が陽性となり、入院治療が必要となった患者さんを受け入れていただきました多くの医療機関とスタッフの皆様に心から感謝いたします。

一方、2021年5月からは、近隣の医療施設の職員の方々とかかりつけ患者さんへのワクチン接種を開始し、12月に、2回目の接種を終了しました。2022年1月からは3回目の接種が始まり、日常業務を行いながらの忙しい日々が続きますが、コロナ収束に向け、全職員が協力して、無事に完了したいと思います。

さて、当院は、1987年に開設されてから、昨年12月で開院34年目を迎え、新病院へ移転してから、早くも8年が経過しました。当院は、これまで、消化器、血液、がん、リウマチ性疾患の専門病院としての役割を果たしてきましたが、高齢患者さんの増加に伴い、common diseaseのサブアキュートの受け入れが増加しており、近隣医療機関や介護施設との連携は益々、重要になってきています。コロナ流行により中止を余儀なくされている連携の会や勉強会、セミナー等を今年中には再開し、より密接な関係を築いていきたいと考えています。

ウィズコロナ下での受診抑制は、まだ完全には回復せず、超高齢化と少子化による医療需要のピークアウト、在宅医療患者さんの増加、疾病構造の変化など、近い将来に対処しなければならない事態が、コロナにより加速していると思われます。2022年4月には、診療報酬改定を控えており、病院運営にあたって、さらなる工夫と努力が必要となります。オンライン診療、ICTの導入、働き方改革など、取り組むべき課題は山積しており、医療情勢を見極めながら、一つ一つ対処していかなければなりません。病院の理念である、思いやりのある医療を忘れずに、職員一同、地域の住民の方々の健康を守るために、精一杯がんばっていききたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



ごあいさつ

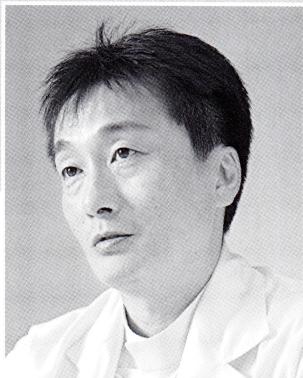
副院長 矢野 智之

医療連携機関の皆さま、平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。当院は昭和62年に開院し、平成25年に全室個室の札幌清田病院と新装して、今年7月から10年目に突入します。令和2年からのコロナウイルスの流行で、当院も大変厳しい環境の中、少しでも平時に近い医療を提供できるように努力してきた2年でもありました。

昨年の手術件数は3年前の8割程度となっていますが、悪性疾患についてはほぼ同数で、地域の患者さんの必要性や緊急性に重点を置いた結果であると考えています。そのような中で、外科では平成21年9月より、いち早く導入した“単孔式”腹腔鏡下手術症例数も胆石症の総数では500例を超えました。また、鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術も500例を超え、今年は胆石、鼠径ヘルニアの専門外来を開設して、これまで以上に患者さんにわかりやすく安心して頂けるサポートを心掛けていく所存です。そして、病院全体としては消化器内科、外科、血液内科、リウマチ科、緩和ケア科一丸となって、地域の基幹病院として、新しい情報を発信しつつ、地元の要望に積極的に対処していきたいと考えています。

最近、コロナを契機に、本当に受診が必要な患者さんのみが受診するという、本来あるべき姿に回帰する機会にもなっているのかなと感じることがあります。札幌市内で唯一総合病院のない清田区で、“Aging in place”という、住み慣れた地域で診断し、治療（手術）し、そして看取りまで地域内で循環してサポートするシステムを構築したいという考えのもと近隣地域の他の病院、施設との横の連携も少しずつ強化してきました。地域でのさらなる効率化を求めてこれからも連携を深めていく予定です。同時に、感染予防のために面会制限を行った結果、病院としての、“隔離された空間”としての課題も浮上し、オンライン面会など対策を講じていますが、在宅を希望される方が増加し、統計的にも訪問看護、訪問診療のニーズが確実に増えてきている状況です。

“患者さんにとっての幸せとは何か”“生活と医療の線引きはどこなのか”。若い時にはあまり考えたことのない、大切な設問です。健康であることが一番ですが、病気になっても小さな幸せを糧に頑張って生き抜いてこられた方がたくさんいることを医療介護の現場で教えて頂きました。この設問に答えるべく、これまで以上に介護や訪問診療、看護との連携を密にして、来院する患者さんの病気だけをただ診るのではなく、その人となりを知り、こちらからサポートできることを発信し、地域の人に安心して信頼して頂けるように、これからも努力していく所存ですので、ご指導、ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。



ごあいさつ

副院長 長町 康弘

皆様には日頃より大変お世話になっており、誠にありがとうございます。未だ新型コロナウイルス感染症パンデミックの真ただ中ではありますが、令和2年1月の北海道での感染者初報告から2年経ち、手探りで検査もままならない時期から、現在は様々な知見を得、経験を積み、日常診療は大きく変化していきました。

振りかえりますと令和2年1月末、春節で来日された武漢の中国人女性がコロナ肺炎で千歳から札幌に運ばれたというニュースが報じられ、当院ではその直後の2月2日に休日当番がありました。見えないウイルスを恐れ、中国からの観光客の方やその濃厚接触者が熱発で来たらどうのように対応しようかと思案しながらの休日当番でした。当時は、コロナ肺炎を疑ってPCRをするにも保健所に電話をして症状を説明し、行政側の承諾が無ければ検査ができない時期でした。しかも、当初PCR検査は武漢、湖北省縛りで、重慶から来た留学生の発熱女性のPCRを断られたこともありました。後に、保健所、道立衛生研究所でのPCR検査のキャパシティが少ないことを知らされ、行政におきましても、その対応は難しかったのだと理解しました。又、市中では既にマスクが枯渇しており、当院でも、マスクの在庫は1ヶ月1人5枚と制限されました。ガウン、フェイスシールドなどのPPEも消毒液も少なく心細く診療をしていたのを思い出します。クリーンルームに入るたびに捨てていたマスクが無くなるとは思いませんでした。

緊急事態宣言、まん延防止法が出されると、患者さんの受診抑制もあり、外来、入院患者さんも減少していましたが、この時期、特に入院でコロナ患者さんの診療にあたる病院では、入院が必要な他疾患の患者様の病床が確保できず、当院への入院の打診をいただき、できる限りご協力させていただきましたし、現在も継続して心がけております。

その後、発熱外来を設置し、対応をしていきましたが、最前線に立つ外来の看護師さん、事務方、職員の方たちは極めて冷静に、理性的に対応いただき、なの花薬局様の御協力も得て、検査から投薬までスムーズに対処でき、本当に感謝しています。

また外来を通院していただいている患者様達からも暖かいお言葉や、手作りのフェイスシールドをいただくこともあり、コロナ禍の診療にあっても嬉しいことも沢山ありました。

現在はマスクなどのPPEもあり、PCR検査もその日にでき、患者さんも常にマスクをしての診療となりましたが、少しずつ日常が戻ってきた印象です。当院では幸い現在までクラスター化することなく日常診療が続けられていますが、これもひとえに、体調管理、感染対策を続けて下さっている職員の皆様、ご家族のご理解、また出張でお手伝いに来ていただいている先生方のご協力のお陰だと感謝しております。当院は、消化器と血液のがん、膠原病等の専門的な疾患の診断、診療に力を注ぐとともに、清田区の中で地域医療に貢献することを目指して診療をしております。今後もコロナ変異株が様々出現し、私どもの社会はコロナと縁が切れることは無いように感じます。当院の理念に沿った診療を続ける為には今後も継続した感染対策が必要であり、職員一同協力して乗り越えていきたいと思ひます。

最後まで読んでいただいたみなさま方と、そのご家族や大切な方のご健康と、もしご病気の方がいらっしゃれば、その御回復を心からお祈りいたしております。



ごあいさつ

副院長・看護部長 高佐 洋子

当院は1987年12月に開院し、2022年12月には35年を迎えます。この35年間で2020年、2021年は最も新型コロナウイルスにより激動の年となったのではないのでしょうか。

2019年12月、中国・武漢での新型コロナウイルス感染症の流行が報道されました。2020年1月には札幌市でも新型コロナウイルス陽性者が確認され、長い新型コロナウイルスとの闘いが始まりました。また、2021年は新型コロナウイルスに加えてワクチン接種に明け暮れた1年となりました。

振り返ってみますと、2020年当初、感染対策に関する物資の不足から始まり、私達の行動制限が余儀なくされ、更に患者家族の面会制限、研修や委員会活動の制限、イベント自粛、そして看護学生実習の受け入れ制限など今まで当たり前にできていた日常の変化、そして組織を運営する上でも様々な工夫が必要となりました。

当院は20床の緩和ケア病棟を持つ一般急性期病院です。又、入院患者は、抗がん剤の治療を受けるなど感染リスクの高いがん疾患を持つ患者が半数以上占めており、感染対策はより一層の強化が必要でした。また、当院は新型コロナウイルス陽性患者の受け入れ指定病院ではありませんが、地域内での医療を担うことも当院の大事な使命でもあり、可能な限り、新型コロナウイルス陽性が疑われる患者の対応も行ってきました。当然、第1波～第5波の爆発的な感染者が発生した状況では、常に陽性患者が発生するかもしれないという危機感もありました。誰もが経験したことのないこの状況、誰もが「自分もコロナに感染するのでは」「患者さんに感染させるかもしれない」など不安は常につきまといました。患者さんを守り、そして自分を守り、安全に日常の業務を行うためには組織全体の感染対策の構築、そして一人一人の危機意識が必要と感じました。

先にもお伝えしましたが、新型コロナウイルス感染により、組織活動は思うように進めることができませんでした。しかし、反面、感染対策上、今まで気づかなかったことを改めて考える機会にもなり、学びを得た期間でもありました。当院では毎年4月には新人看護師を含めた看護職員が入职します。その中で特に新人看護師については、このコロナ禍の状況で十分臨床実習の経験がないまま、入职となります。そして、このコロナ禍で新人看護師同士、先輩看護師との交流もなかなかできない状況でどのように職場適応を図っていくのかも課題となり、従来にはない工夫や方法が必要となりました。今回の感染対策で苦慮したひとつが入院患者の面会制限でした。特に緩和ケア病棟の面会については、感染対策と患者のQOL、どちらが優先することでもなく、又「感染対策」の一言で結論が出るものでもありませんでした。少しでも患者家族の希望に添えればと思い、オンラインでの面会の整備を行いました。しかし、面会は単にお互い顔が見られ、会話ができればというものでもないことを知ることができました。面会は患者家族が同じ空間に同じ時間を共に過ごす、そのことがいかに大切なことであるかを改めて知り、深く考える機会にもなりました。2022年1月、未だ新型コロナウイルス感染の終わりは見えません。新しい生活様式となり、その中で私達は患者さんに安全な看護ができるような環境作りが常に求められています。看護の基本を忘れることなく安心した看護を提供できるよう努めていきたいと思っています。



ごあいさつ

事務部長 広岡 篤美

雪まつりのニュースを目にする機会が増えてきましたが、この年報のキーワードとなるであろう「コロナ」という言葉が身近になったのは、2年前の雪まつりの時期でした。

それからの2年間はこの一言に尽きるといっても過言ではないと思います。

その後コロナはいくつもの波として押し寄せてきました。そのたびに外来患者さん、入院患者さんの数も大きく変動しました。その中でも、本来の当院の機能を維持し、さらに発熱外来、近隣の医療従事者や住民の方へのワクチン接種など地域に根差す医療機関としての役割を担うことができたのは、職員の皆さんの力とご協力であり、改めて感謝いたします。

コロナ禍のトピックを振り返ると、2020年は2月以降マスクをはじめとする個人防護具等の物資不足が顕著になりその確保に職員も奔走しました。3月には院内感染防止のため外来のゾーニングを実施し、10月以降は診療・検査医療機関の指定を受け、札幌市発熱外来に登録、それに伴い外来駐車場にプレハブを設置し、外来玄関でのトリアージを開始しました。2021年は、4月からコロナワクチン接種が始まり、12月までに職員・医療従事者をはじめ高齢者など、5000人を超える方々へ接種を行いました。

また、様々な規制や自粛のなかで学会・研修会等が中止となり、院内でも集団での学習会・研修会や委員会、職員間の交流や親睦の機会である新入職員歓迎会、観楓会、忘年会等を中止せざるを得ませんでした。感染対策のもと、委員会等は少しずつ正常に戻ってきましたが、コロナ禍以前に戻るのには少し時間がかかりそうです。

このような状況下で、2020年4月の診療報酬改定では入院基本料の要件が見直されましたが、2019年に開設した地域包括ケア病床の効率的な運用やさまざまな工夫により、急性期病院としての機能を維持しつつ、ポストアキュート、サブアキュートの患者さんへの細やかな対応が可能になり、これまでの入院基本料を維持することができています。今年の4月には次の診療報酬改定が控えていますが、地域における急性期病院としての役割を維持していく必要があります。

へき地医療機関への出向も、感染者の発生状況による移動の制限のため休止せざるを得ない期間も生じましたが、出向先機関のご理解のもと継続して対応させていただいています。社会医療法人としての役割を果たしつつ、地域貢献できる体制を維持できるように努めます。

今年度は、長年の検討事項であった電子カルテが導入されます。コロナ禍で予定通り計画が進むのか不安もありますが、新築移転以降最大の事業となります。導入によっていろいろな効果が想定されますが、職員全員で取り組み無事に稼働できるように考えています。

末尾になりましたが、この2年間さまざまな皆様からご支援や温かいお言葉をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。